

有岡城跡・伊丹郷町遺跡

第 276 次調査資料

伊丹市教育委員会

有岡城跡・伊丹郷町遺跡第276次調査資料

1. 遺跡名 有岡城跡・伊丹郷町遺跡
2. 所在地 伊丹市伊丹1丁目4
3. 調査期間 平成15年9月17日～
4. 調査面積 4,000㎡ (現在調査地2,768㎡)
5. 調査主体 伊丹市教育委員会

6. 遺跡の概要 この遺跡は、古くは縄文時代に遡り、弥生時代・古墳時代・奈良時代・平安時代と各時代の遺跡も発見されていますが、遺跡の主たる時代は、鎌倉時代から江戸時代にかけての時代です。さらに鎌倉時代から安土桃山時代にかけての「伊丹城・有岡城期」と、廃城後の江戸時代に栄えた「伊丹郷町期」に分けられます。この二つの時期の遺跡について、その概要を述べておきます。

伊丹城・有岡城

伊丹城はこの地方に根を下ろした伊丹氏代々の居城として、少なくとも14世紀前半(南北朝)から認められます。その後15世紀を経て16世紀に入ると管領細川家との関係から、伊丹城をめぐっての攻防が繰り返られるようになっていきます。伊丹城に天守があったという記録(「細川両家記」:1520年)もこの頃のことです。この時の記録では、伊丹城を守っていた伊丹但馬守と野間豊前守の二人が、「四方の木戸(城門)を閉じて家々に火を放ち、天守にて切腹した」と記されています。

伊丹城最後の城主伊丹親興は、永禄11年(1568)に織田信長が入京すると信長方につき、芥川城の和田惟政、池田城の池田勝正とともに「摂津の三守護」と呼ばれるようになりますが、池田城の池田勝正を追放し、また和田惟政を敗死させるなど北摂地域に勢力を伸ばした荒木村重により、天正2年(1574)に伊丹城を追われました。替わって城主となった村重は、城名を有岡城と改め、摂津の一國を代表するにふさわしい城造りに着手しました。「惣構えの城」の完成であります。

(惣構えの城)

中世の城は、城と家臣団の居住地(侍町)と町が分かれています。次第に城と侍町、城下町が近接して配置されるようになっていき、さらに、その周囲を堀や土塁などの防御施設によって囲むようになっていきます。そうした、町までも防御施設の内に取り入れた構造を「惣構えの城」と呼びます。有岡城は、惣構の城としては早い段階で成立した先進的な城とされています。

(有岡城の立地)

- ・自然地形を巧みに利用—伊丹段丘東端の高台を利用

南に向かって緩やかに下る伊丹段丘の東端に立地します。惣構北端に位置する岸ノ砦跡(現猪名野神社境内)が最も標高が高く19.4m、南端の鶴塚西側が12.8mと最も低く、比高差は6.6mあります。主郭部(本丸)のある惣構の東端は段丘崖となり、その東側には猪名川流域の沖積地が続いています。段丘下との比高差は岸ノ砦付近で約8m、鶴塚付近でも3~4mあり、自然地形を有効に利用した城と言えます。それに対して西側の比高差は少なく概ね2m前後で、猪名野神社付近ではむしろ城外が高くなり、有岡城にとって弱点となりますが、その関係からこの場所に岸ノ砦が設けられたと考えられます。主郭部は、明治時代に鉄道の敷設によって大きく削り取られて旧形を残していませんが、その西側が現在の有岡城跡公園になります。

以上のように、有岡城は伊丹段丘の最も発達した高地を選び、自然地形をうまく利用して築城されていることがわかります。

(有岡城の規模)

有岡城惣構の範囲は、南北1.8kmにおよび、東西方向は最も広い場所で800mほどあります。主郭部の規模は、南北200m、東西150mで、惣構の北端に位置する岸ノ砦は、現在の猪名野神社境内の範囲と仮定すると、南北150m、東西が150mの範囲となります。惣構西縁中央に位置する上臈塚砦は、発掘調査で見つかった堀跡から、その範囲は南北100m、東西100mほどであったと推定されます。また、鶴塚砦は現在も残る塚を含めた相当な範囲と考えられます。

(有岡城の構造)

- ・城・侍町・町

有岡城の主郭部は、現在のJR伊丹駅を中心とする範囲にあり、その西側に侍町、さらに西側に町が存在していたことが「信長公記」の記述(「町をば居取にいたし、城と町の間侍町あり。是れをば火を懸け、生か城にされたり。」)や江戸時代に描かれた絵図からわかります。

・大溝筋と土塁

大溝筋は、江戸時代の絵図では伊丹郷町の中央部を南北に流れる水路として描かれています。文禄伊丹之図では、大溝筋に沿って土塁状の表現が描かれていることから、侍町と城下町を区画する防御施設であったと推定されていました。平成11年に行われた県道伊丹停車場線の発掘調査により、大溝筋の実態が初めて明らかになりました。それによると、大溝筋は、もとは幅約6m、深さ2.7mの掘で、江戸前期頃に埋められ、その上に石組みの溝(水路)が造られていることがわかりました。

今回の調査で発見された大溝(堀跡)は、発見された位置や規模から停車場線の大溝と繋がると考えられます。

・岸ノ砦・上臈塚・鶴塚

有岡城は、惣構縁辺部の外構えの要所に砦を設けています。惣構の北端部には、岸ノ砦、南端部には鶴塚、西縁中央部に上臈塚の3箇所です。東縁中央部に主郭部がありますので、外構えの東西南北の各要所に防御拠点が配置されていたこととなります。

岸ノ砦— 岸ノ砦は、西側城外が地形的に高く、惣構の中で最も地形的に弱い地点です。そのため、土塁を高く積み、堀を二重に構えていたほか、堀底に乱杭を設けて防御していたことが発掘調査によってわかっています。天正7年の信長による有岡城攻めの折には、渡辺勘大夫が守っていました(信長公記)。

上臈塚— 上臈塚は、古墳時代前期の前方後円墳を利用して砦が築かれていました。古墳の墳丘周囲に幅3~3.5mの堀が巡らされていたようです。信長の有岡城攻めの折には、外構えの要として多くの武将により守備されていましたが、信長方に内応した中西新八郎らによって砦が開かれ、落城のきっかけとなりました。

鶴塚— 有岡城の南端を守る。現在も残る鶴塚は、古墳時代中期の古墳であることが、2度の発掘調査で確認されました。砦の遺構としては、直径2.2mの大型の井戸が発掘されています。信長の有岡城攻めの折には野村丹後ほか雑賀衆が配置されていました。

外構え— 惣構の周囲を土塁と堀で防御していました。土塁は、猪名野神社境内西側以外に残っていませんが、文禄伊丹之図、寛文九年伊丹郷町絵図などにはその様子が描かれているので、江戸時代前期頃には残っていたことがわかります。

伊丹郷町期

天正7年の落城時に焼かれずに残った城下町は、その後、江戸時代を通じて発展していきます。その発展過程で、一旦は空地と化した旧侍町へも町が広がっていきました。

この伊丹郷町は、伊丹村・大広寺村・北少路村・毘陽口村・外城村など15カ村からなる町場を形成していました。そのうち伊丹村が伊丹郷町の中心部にあたります。伊丹村には文禄年間（1592～96）には15町でしたが、その後、享保年間（1716～36）までに27町が成立していきます。今回の調査地点は、伊丹村の魚屋町にあたります。

伊丹郷町15カ村のうち、伊丹村など12カ村が近衛家の領地でした。

（伊丹の酒造業）

・清酒発祥の地

伊丹市北部の鴻池が清酒発祥の地と言われています。鴻池の児童公園内には清酒発祥の経緯を記した江戸時代の石碑があります。それによると、尼子氏の家臣山中鹿之介の長男が鴻池に住み、酒造業を営んで慶長五年（1600）に清酒の醸造法を発見したと記されています。この山中家の一族が、その後大坂に出て豪商鴻池家となっていきました。

・伊丹郷町の酒造り

伊丹郷町では、江戸時代前期には36人の酒造家がいってたくさんの酒を醸造し、主に江戸に送っていました。江戸時代中期には今津や灘の酒造業が台頭してきますが、伊丹の酒は上質の酒（丹醸）の生産地として全国にその名が知られていました。当時の伊丹の銘酒としては、「剣菱」・「男山」・「老松」・「白雪」などがありました。

伊丹郷町の酒造業最盛期には85軒の酒蔵が軒を並べていました。江戸後期の文化3年（1806）には、22万樽（四斗樽）もの酒が江戸に樽廻船などで運ばれていました。

今回の調査地点には、3軒の酒蔵が建っていました。

7. 調査概要

この調査は、店舗建設に伴って実施しています。現在のところ、全体の調査面積の約2/3(南地区)について発掘調査を実施しています。この場所には、上層に江戸時代の酒蔵跡、下層には有岡城跡関係の遺跡が存在します。現在は調査範囲の北側で上層の酒蔵跡が、南側では上層の調査が終わり、下層の有岡城跡の堀跡を調査しています。

今後は、北側も下層の調査を行い、さらに、現在残土置き場となっている南地区の発掘調査を進めていく予定です。

8. 調査成果

現在調査中ですから、調査成果も途中経過となります。これまでに発掘された成果から、その主なものを取り上げて説明します。

(伊丹城・有岡城期)

・堀跡

現在のところ、調査範囲の南側のみで発掘していますが、事前に行った試掘調査で北側に延びていることがわかっています。堀跡は江戸時代の大溝の下にあると予想していましたが、南側では大きく西側に外れていました。南側から見ると、北に延びた堀が直角に東に折れ、その先でさらに直角に北に折れています。つまり、「鍵の手状」に折れながら南北方向に延びていることがわかりました。

規模は、幅6.5m、深さは2.6m。形状に特徴があり、堀の内側に一段テラス状の平坦面が造られていました。また、堀の底も平坦ではなく、段差が付けられていました。

・その他の遺構

調査途中ですが、伊丹城期の瓦が出土する遺構が存在することがわかってきました。また、弥生時代の土器も僅かながら出土していますので、今後調査が進めばさらに出土する可能性があります。

(伊丹郷町期)

・酒造遺構

江戸時代の酒造遺構には、カマド・男柱・井戸・蔵の礎石建物跡などがあります。その主なものを紹介します。

・カマド

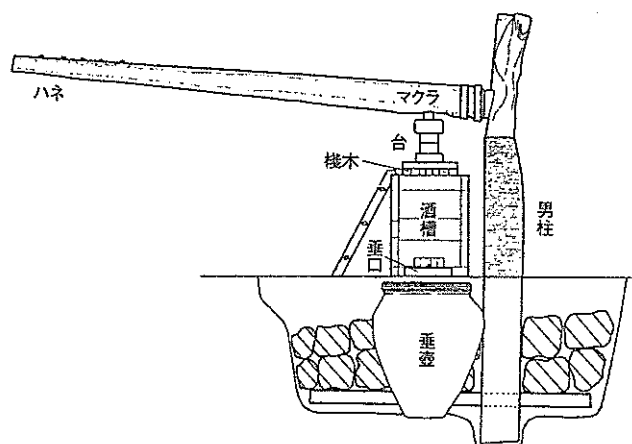
カマドは調査範囲に14箇所見つかっています。このうち大型で酒造用とされるものは10箇所です。それぞれ時期がことなっていますので、作り替えが行われてことがわかります。古い時期のカマドは比較的規模が小さく、粘土と瓦で造られています。後のカマドは大型になり、加工した石やレンガを用いています。

- 酒造用**—カマド2 2基1組。南側は径1.1m・深さ70cm、北側は径98cm・深さ70cm。江戸前期。
- カマド3 2期1組。南側は径1.1m・深さ70cm、北側は径93cm・深さ50cm。焚口部は南北2.5m・東西1.6mの長方形。江戸前期。
- カマド4 2基1組。上部が壊れ規模は不明。南側が大きい。凝灰岩の切石を用いて構築。灰の掻き出し溝から灯明皿が4枚出土。焚口部は大きく、南北3.8m・東西2.7m。江戸後期。

- カマド5 単基。径 1.4m・深さ 1m。凝灰岩の切石を用いて構築。灰掻き出し溝にレンガを用いている。明治時代。
- カマド6 レンガ造りのカマド。上部が壊れ規模など不明。カマド5より新しい。
- カマド10 単基。径 1.7m・深さ 1.5mの大型のカマド。粘土と瓦を積み上げて構築。カマド5より古い。江戸後期。
- カマド11 カマド10に切られる。詳細不明。
- カマド12 2基1組。北側が大きく、南側が小さい。カマド13に焚口部を切られている。詳細不明。
- カマド13 2基1組。未調査のため現在のところ詳細不明。
- カマド14 カマド6に切られる。未調査のため現在のところ詳細不明。

- 賭い用**—カマド1 3基1組。径 70 cm・深さ 10~20cm。
- カマド7 4基1組。径 46~55 cm。北側から南側に順に大きくなる。深さ 40cm。
- カマド8 5基1組。カマド7に切られる。未調査。
- カマド9 5基1組。径 54~58 cm。深さ 20~30cm。
- カマドの構築順序はカマド7→カマド8→カマド9で、カマドは江戸時代後期。

- 男 柱**—男 柱1 長さ 4.3m・幅 2.3m・深さ 2.4m。北側に垂壺の穴1箇所あり。江戸後期。
- 男 柱2 長さ 3.7m・幅 3.5m・深さ 1.8m。同じ場所に何度かの造り替えが行われている。江戸後期。
- 男 柱3 長さ 3.5m・幅 3m・深さ 2m。西側に垂壺の穴2箇所あり。江戸前期。
- 男 柱4 長さ 3.9m・幅 2.9m・深さ 1.8m。北側に垂壺の穴2箇所あり。江戸前期。



男柱遺構復元図

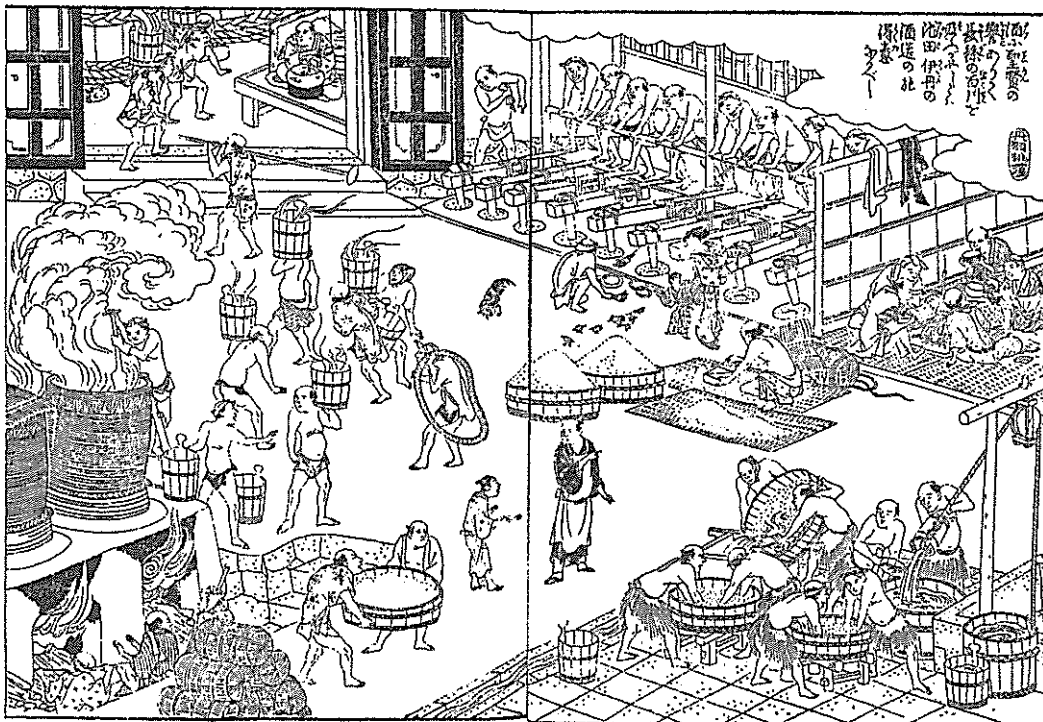
井戸— 井戸は、調査区内に10基確認されている。小さいものは径80cm。大型のものは径1.8mにもなる。時代が新しくなるほど大きくなる傾向がある。元禄大化の焼土で埋まった井戸4は径1.4m。最も新しいコンクリート枠の井戸10は径1.8m。

礎石建物跡— 酒蔵に關係する建物跡が3箇所で確認された。礎石建物跡1～3の礎石は、いずれも方形の掘り方に大きな川原石を数段積み上げた構造をもっている。そのうち礎石建物1は、東西16.5m以上、南北10m以上と推定される。

大溝— 調査区を南北方向に延びる大溝は、壁面を大形の川原石を積んで構築されている。石垣の下には丸太や大きな板材を基礎に使っている。石垣には石臼が用いられている箇所があり、また石の積み方が場所によって違っているなど、度々石垣の修復が行われたものと考えられる。大溝の構築年代は堀が完全に埋められた江戸前期以降と考えられるが、溝から出土した陶磁器の年代は江戸後期である。

9. おわりに

現在のところ調査の途中ですから、現時点で遺跡の詳細は明らかではありませんが、大規模な酒蔵跡や有岡城期の堀跡の発見など、今回の発掘調査では大きな成果が得られそうです。また、今後の調査の進展により新たな成果も期待されます。ご期待ください。



「撰津名所図会」下巻 臨川書店 1979年より

(参考資料)

信長公記

天正6年(1578)

10月21日 荒木村重の謀反の風聞伝わる。

11月14日 信長勢、伊丹に押し寄せる。

12月08日 「申の刻より、諸卒伊丹へ取り寄せ、堀久太郎・万見仙千代・菅谷九右衛門両三人御奉行として、鉄砲衆を召し列れ、町口へ押し詰め、鉄砲をうたせ、其の次、御弓衆、平井九右衛門、中野又兵衛、芝山次大夫、三手に分ちて、火矢を射入れ、町を放火仕るべき旨、仰せ出ださる。酉の刻より、亥の刻まで、近々と取り寄せ、攻められ、壁際にて相支へ、万見仙千代討死候。」

12月11日 「所々に付城仰せ出だされ、信長公、古池田に至って御陣を移さる。」
取出の所在地一塚口郷、毛馬村、倉橋郷、原田郷、刀根山、郡山、古池田、加茂、高槻の城、茨木城、中島、ひとつ屋、大矢田

天正7年(1579)

04月29日 「古池田まで御帰陣。……其の外衆、伊丹表定番仰せ付けられ候へキ。」

取出の所在地一塚口郷、塚口の東、毛馬、川端取出、田中、四角屋敷、
河原取出、加茂岸、池上、古屋野古城、深田、倉橋

09月02日 「荒木摂津守、五、六人召し列れ、伊丹を忍び出で、尼崎へ移り候。」

10月15日 「滝川左近調略を以て、佐治新介使を仕り、中西新八郎を引き付け、中西才覚を以て、足軽大将の星野、山崎、隠岐、宮脇、謀叛いたし、上臈塚へ滝川人数引き入れ、数多切り捨て候。取る物も取り敢へず、上を下へとなって、城中へ逃げ入り、親子兄弟をうたせ、なきかなしむ計りなり。町をば居取にいたし、城と町の間侍町あり。是れをば火を懸け、生か城にされたり。きしの取出、渡辺勘大夫、盾籠り、同者紛に、多田の館まで罷り退き候を、兼て申し上ぐる儀これなく、曲事の旨御諭にて、生害させられ、又ひよどり塚に、野村丹後、大将として雑賀の者相加へ、抱へ候。悉く討死にて、丹後、御諭言申し候ところ、中々御許容なく、生害候て、……諸手四方より、近々と押し詰め、城楼かねほりを入れ、攻められ、命御助けなされ候へと、御諭言申し候へども、御許容これなし。」

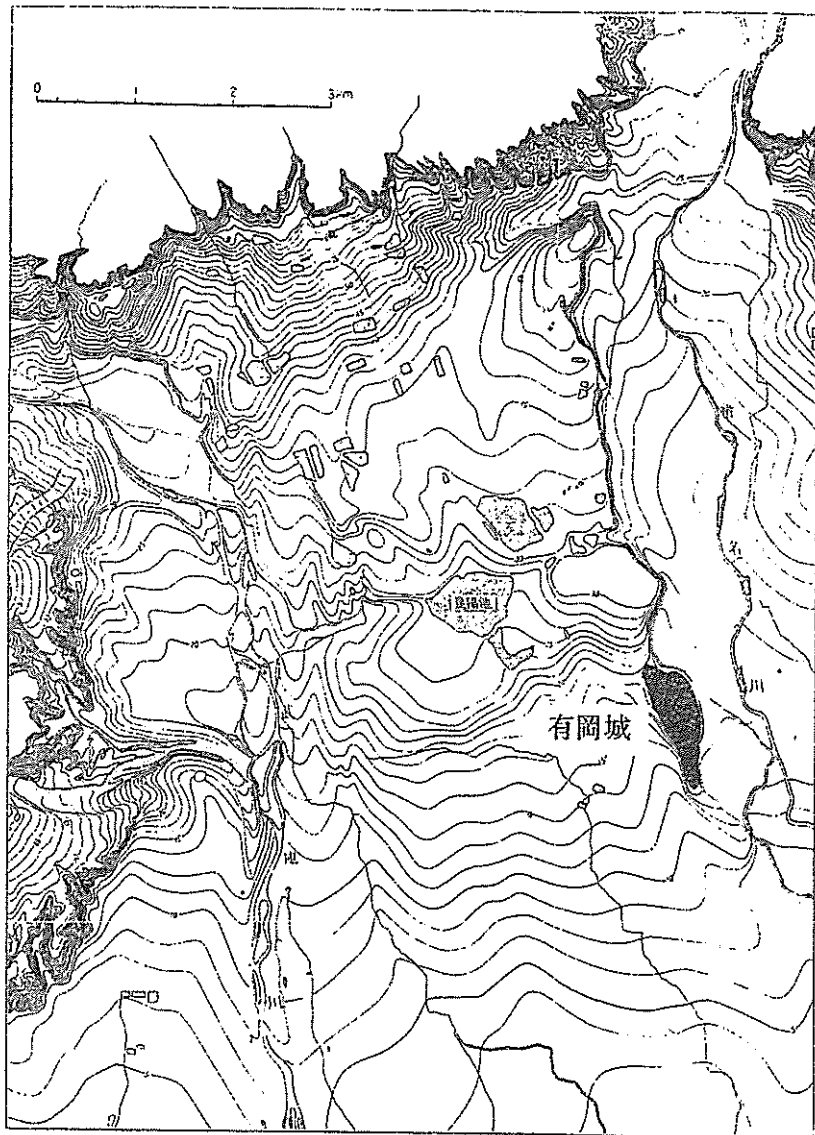


図1 有岡城位置図
 (「伊丹市史」第1巻より)

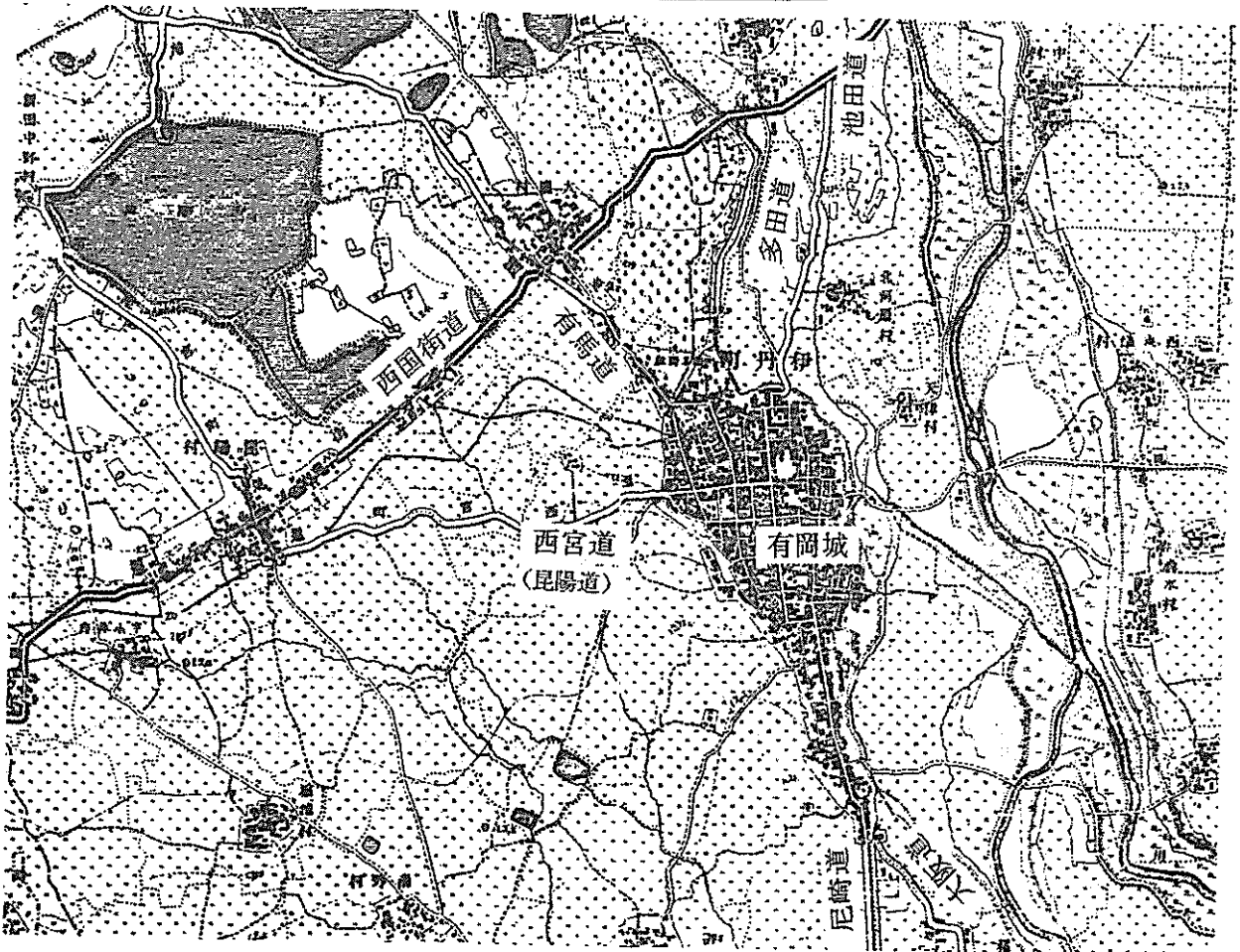


図2 有岡城位置図 (2万分の1仮製地形図)

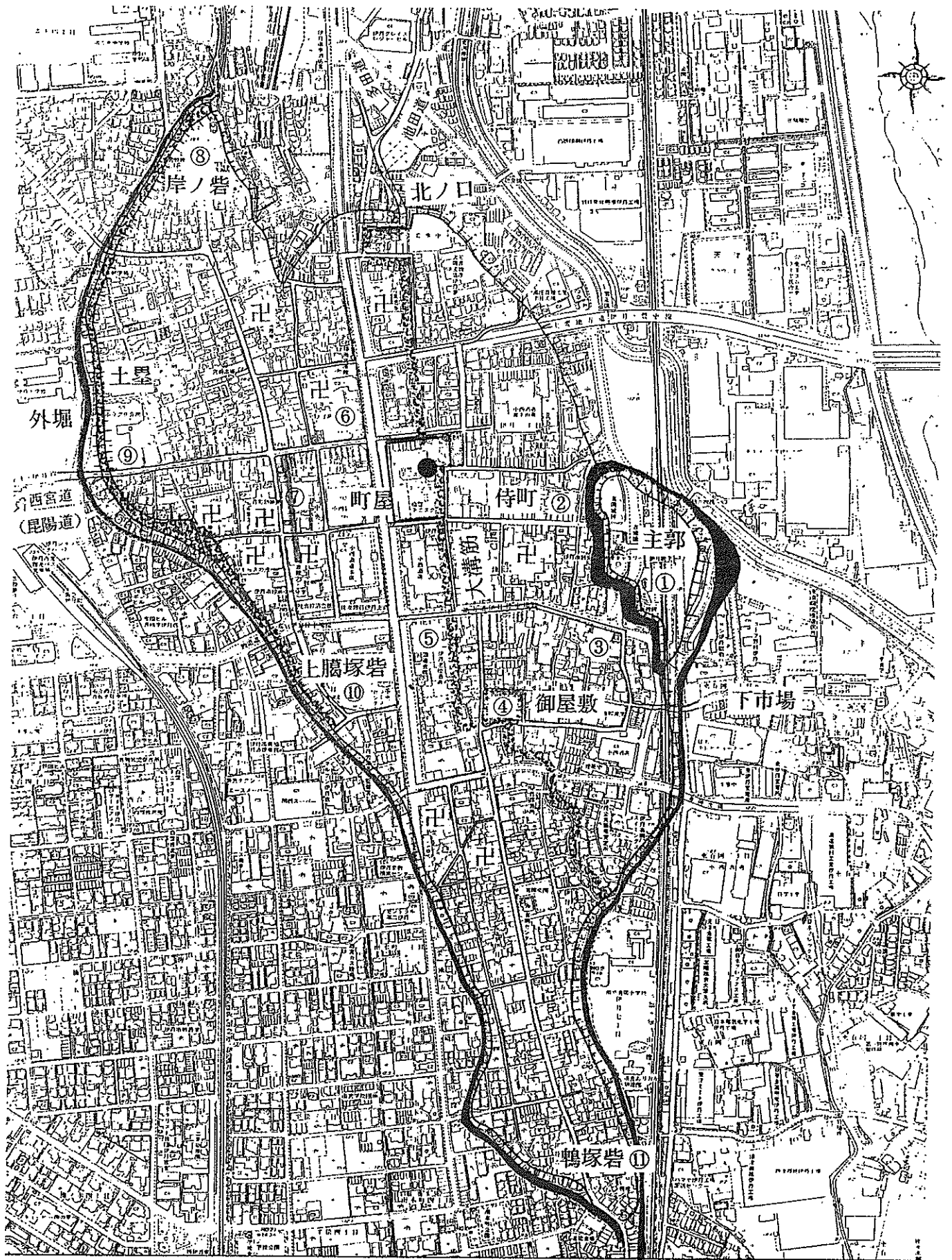


図3 有岡城惣構概念図

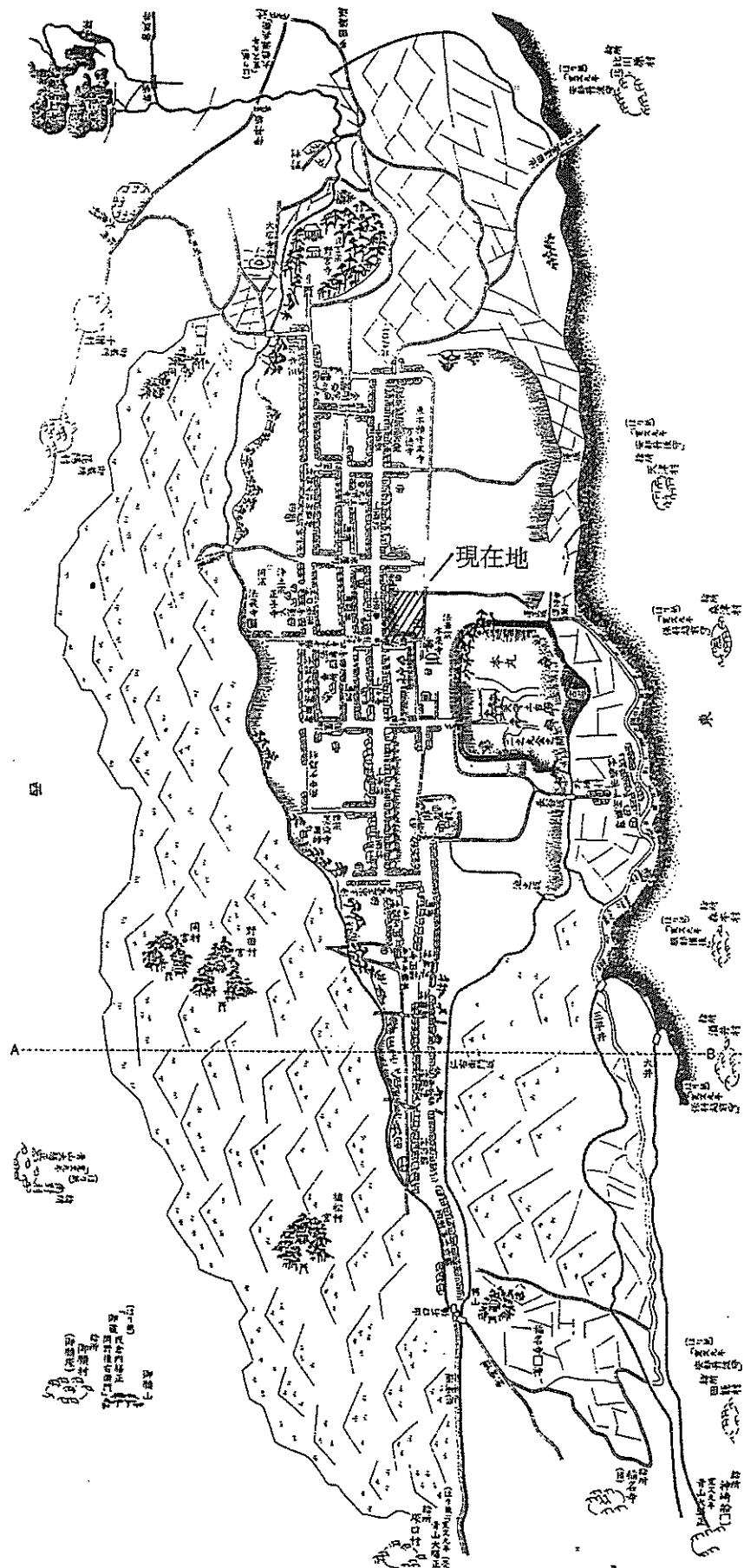


図5. 寛文九年（1669）伊丹郷町絵図
 （八木哲浩編『伊丹古絵図集成 本編』「伊丹資料叢書6」伊丹市立博物館1982年より）

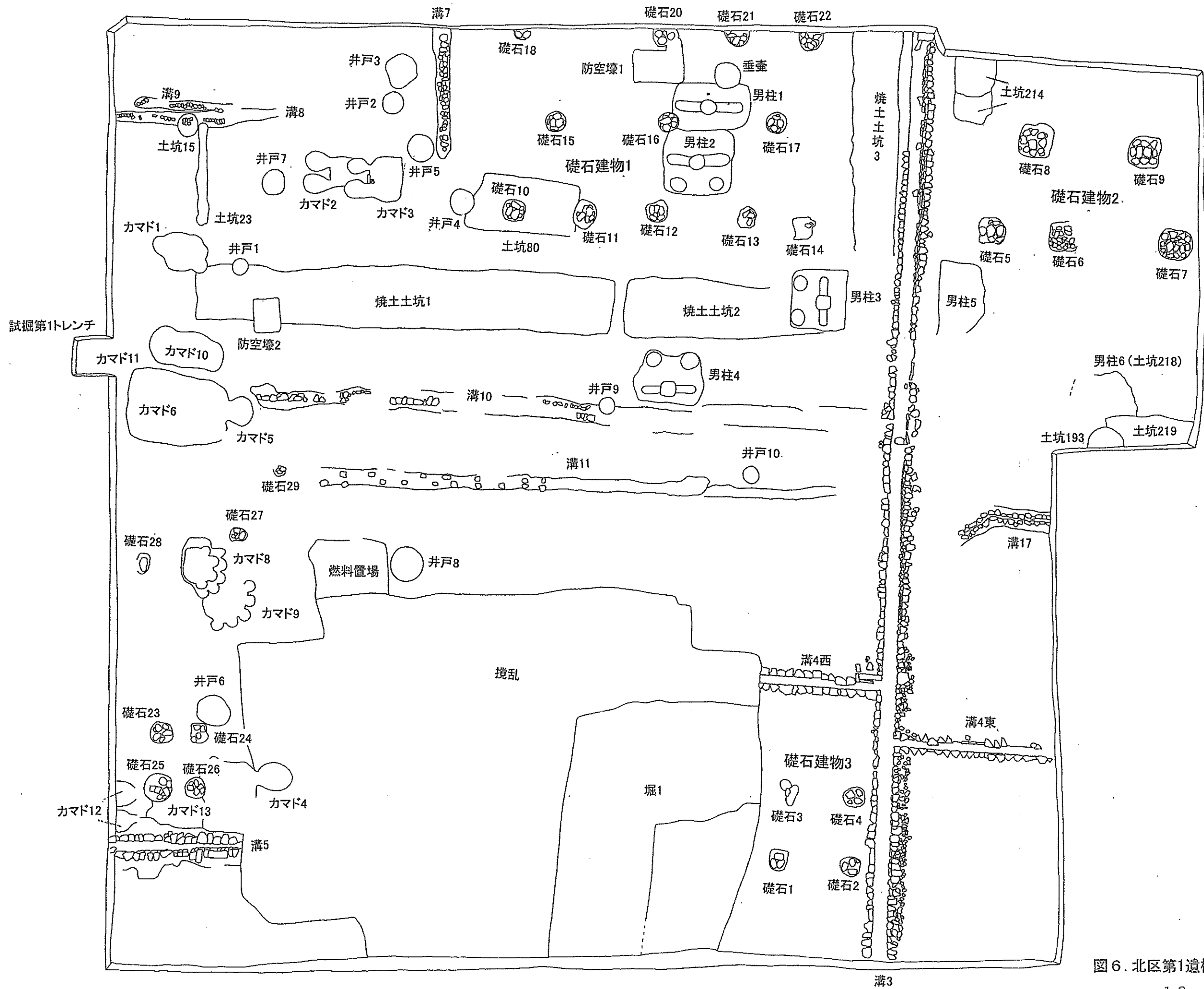


图6. 北区第1遺構面平面图 (1/200)